

## V スピリチュアルないたみと森田療法

一〇〇一年六月下旬、第五回国際哲学精神医学会がパリ大学において開催された。学会のメインテーマは「いたみ」であったが、筆者は仏教の立場からこのテーマに関して発表するよう要請を受けた。そこで仏教の叡智を生かした精神療法である森田療法の立場から、「スピリチュアルないたみと森田療法」と題する特別講演をソルボンヌ大学でおこなった。現代人の精神の危機的な状況に対する本療法の救済可能性を探り直すことが、積年の課題でもあつたので、講演へ向けて考察を練り、発表稿を書き下ろした。その稿を、ほぼ原形のままで邦文化したものが本稿である。

森田療法は、仏教の叡智を撰り入れた日本の代表的な精神療法である。この療法によるスピリチュアルないたみの救済の可能性について、ここに論じようとするものである。

現世において、人間は諸々の苦の体験を避けることができないことを、仏教は教えている。仏教の本義とは、諸々の苦から人間を救うことにはかならない。しかし、身体的な諸苦や精神的な諸苦に対して、それらと関連しながらも、より一層危機的な体験であるスピリチュアルないたみを、私はあえて区別して考えたい。

そこでは最初に、諸々の苦とスピリチュアルないたみの関係と区別について説明し、次に森田療法が、両者いずれに対しても有効な治療たりうる可能性について述べることにしたい。前者、つまり諸苦の問題へのこの療法の意義については、示唆深い日本の小説『注文の多い料理店』を寓話として引き合いに出すことにする。また後者、つまりスピリチュアルないたみの問題へのこの療法の意義については、日本の中世の高僧、明惠上人の自己救済の生涯を辿って、そこに壮絶に生き抜いた人のモデルを見て、それを教訓として示したい。そして最後には、森田療法の真髓の境地や仏教の究極の真理について、仏教ゆかりの植物、蓮をたとえに、言及をつけ加えたいと思う。

### — 苦とスピリチュアルないたみ

仏教によれば、人間はこの世で八苦の試練を受けるさだめにある。そのうち前半の四苦は、人間の存在の基盤にかかる苦であり、後半の四苦は、日常生活の中で体験する苦である（図1）。

第一の苦は、生そのものである。「生まれる」というように、人間は絶対受動的に生を享けるのであり、親も、境遇も、先天的な心身の素質も、一切を自分で選び取ることができない。生まれてしまつたがゆえに、生への執着が起こり、人生への懷疑が起こり、不遇な運命に対するルサンチマンが起こる。この生の苦は、人間の存在そのものにかかるもつとも根元的な苦であり、他の七つの苦を派生させる起源となるものである。この根元的な苦を体験することは、人間にとつて早晚不可避であり、またこれに対する救済は重要な課題があるので、さらに後述したい。

第一の苦は老い、第三の苦は病、第四の苦は死である。これらの三つの苦は、この世から消えていく過程において

て、必ずや体験する。これら前半の四つの苦は、生存の時間的流れの中で体験される人間の存在にかかるものである。

第五の苦は、愛する人との別離、第六の苦は、憎悪の念を抱かざるをえない相手と共生する勤め、第七の苦は、求める対象を得ることができない不満、そして第八の苦は、心身の活動に伴うさまざまな煩惱や葛藤である。これら後半の四つの苦は、日常の生活空間の中で体験される、他者あるいは対象との関係性にかかるものである。

以上の八苦は万人にとって不可避なものであり、それゆえにこれらを否定せず、そのまま受容することこそ、苦の救済の道であると仏教は教える。

ところで周知のとおり、WHO（世界保健機構）は、従来健康を次のように定義してきた。「健康とは、身体的、精神的、かつ社会的に完全に良好な状態のことであり、単に疾病や虚弱さの欠如を指すものではない。」この定義は、実に幻想的で奇妙である。なぜなら、人間にとつて「疾病や虚弱さの欠如」などありえないのみならず、「身体的、精神的、かつ社会的に完全に良好な状態」を声高に謳うことで、苦を排除し、

### 四苦八苦（仏教）



図1 苦の諸相

苦のないユートピアを、人間が到達すべき最高の境地として想定しているように見えるからである。仏教的な苦の観点に照らせばわかるように、心身の、かつ社会的な苦は不可避であるがゆえに、これに抗わず、受苦による超越、すなわち悟りの域に達することこそ、眞の健康状態であろう。従来の健康の定義が実際にそぐわないことは、多くの人によって気づかれていたので、WHOは定義の修正を検討中であり、数年前のその理事会において、「スピリチュアル（に良好な状態）」という表現の追加が可決されたと聞く。その追加の意図については詳らかではないけれども、先に述べたような受苦による超越の境地を、「スピリチュアルに良好な状態」という表現が示しているのであれば、適切な健康の定義になるものとして評価できる。

さてその「スピリチュアルに良好な状態」つまり苦の超越の境地への道は、容易ではなく、至難である。超越に至ろうとして至れない途中の道のりにおいて、人は悩み、絶望し、不全感に苛まれる。この懊惱と呻吟の体験を「スピリチュアルないみ」ととらえたい。

仏教が説く八苦は、苦の分類を目的とするものではなく、人間が体験する主要な苦を示しているのだが、人間が直面するもつとも根源の苦は、八苦の冒頭の生苦である。しかるに現代人は、この基本的な苦をみつめる機会に恵まれず、それを否認し、生の快適さを追求してやまない。したがって当然、生苦に派生する七つの苦をも、抑圧したり否認したりして、結局すべての苦を回避していることが多い。しかしそれらをいつまでも棚上げにして生きることは不可能であり、たとえば死は必ず訪れるゆえに、臨死の人々を救済するターミナルケアも必要になるのである。

このように現代人が、苦の否認、回避に流れる傾向は、もともと神経症者の心的特徴であつたものが、汎化の様相を呈したものと考えられる。これに反して、諸苦、中でももつとも根源的な生苦に伴う原初的なスピリチュアル

ないたみを敏感に受けとめる人たちがいる。それは健常者でも神経症者でもなく、むしろ統合失調症者や、境界型人格障害の人たちである。彼らは、快に固執することもできず、自分たちの存在そのものを、いたみと感じているのである（図2）。

苦とスピリチュアルないたみについて、ここまでに述べたが、次には、森田療法によるそれへの救済の道について、論を進めたい。

二 森田療法

森田療法は、一九二〇年頃に日本人精神科医の森田正馬によつて、心氣的になりやすい素質である神經質や、その素質が症状化した神經症に対する療法として創始された、日本独特の精神療法である。森田は彼自身、幼少の頃、お寺の地獄絵に死の世界を見て、その恐怖に取り憑かれ、さらに思春期より心氣症的な神經症症状に悩んだ。そのようなみずから体験を経て、彼は、症状をそのまま受容し、実際生活の必要性に従つて行動することこそが重要であることに気づき、作業の実践を中心とした療法を創案した。この療法の精髓は、一言で言えば、自然への服従である。この場合、外界の自然と内界の自然は厳

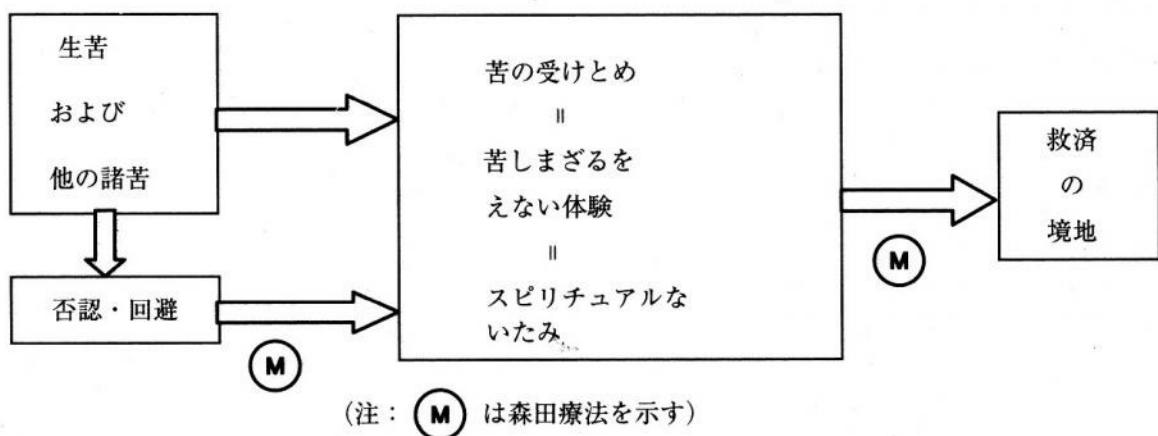


図2 苦とスピリチュアルないたみと森田療法

密な区別を要さず、人間はマクロコスモスの中にいるミクロコスモスとして捉えられる。つまり自然の摂理の中に人間の生命のいとなみがあり、賦与された生の欲望によつて、人は向上心を燃やして自分を發揮し、一生涯前進を続ける。一方生の欲望は、死にたくないという願望でもあるために、死の恐怖に代表されるような諸苦の体験が余儀なくされる。

神経質とは、生の欲望を強迫的に追求するために諸苦を一掃せんとして、逆に諸苦が増幅されて悪循環に陥りやすい傾向のことである（図3）。生の欲望と、それに伴つて起くる諸苦は、本来表裏の関係にあつて不可分である。生の安樂を確保して、苦を排除することは無理というものであり、森田は、神経質やその延長上にある神経症の治療にあたつて、苦や症状をそのまま受容することを教えた。ちなみに彼は多くの揮毫を残したが、その中に次のようないい言葉がある。「苦痛を苦痛し喜悦を喜悦す、之を苦楽超然と言ふ。」森田は療法を完成するにあたつて、仏教に限らず東西のさまざまな思想を活用したけれども、苦に対する向き合い方については、仏教の叡智をそのまま導入したと言つてよい。

ところで、森田が神経質に着目した二十世紀初頭は、日本人が西洋の文明やその合理主義精神の洗礼を受け、高き自我理想を掲げてその実現に邁進することこそ、人間としてもつともすぐれた生き方であるとする、いわば幻想にとらわれ始めた時代であった。このような風潮を背景として、生の欲望を飽くことなく追求する神経質が出現し、森田はその病理の面を治療対象とすることになつたのである。そのため彼は、必然的に生の欲望の過剰さをめぐる心理機制を論ずることになつたものと思われ、「生の苦」

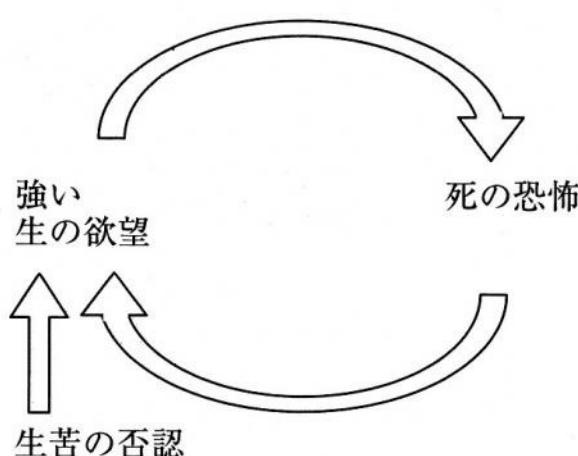


図3 神経質のメカニズム

に悩む患者の治療については、それをあまり本格的には取り上げていない。生苦は人間の存在の根源に深くかかわつておらず、その救済は容易ではあるまい。だが仏教的な苦の救済を生かした森田療法にとって、決してそれが不可能であるとも思えない。かくして、森田療法には、生の欲望の過多の病理としての神経質の治療と、生苦の救済という、ふたつの課題があることになる。

そこでまず第一の課題に沿いながら、この療法の実際について説明する。その特徴は、外来診療よりも、入院方式の独特な治療構造にある。入院してそれを直接体験することなしに、療法の真髓にふれることは難しい。

〔以下で、図4から図6まではすべて写真であり、仏文稿第V章中のFigure 4からFigure 6に対応するまったく同一の図である。ここでは掲載を省略するので、そちらを参照されたい。〕

近年における、本療法への再評価の気運の高まりにもかかわらず、入院システムは現代的な生活にそぐわない古風な格式を有するために、入院治療はかえってますます低調になりつつあり、京都にある三聖病院が、入院原法の森田療法専門病院として現存している唯一のものである。京都の禅宗の大本山東福寺（図4）によって、その近傍に一九二二年に三聖医院が設立され、一九二七年に病院化されたもので、禅僧にして森田正馬の直弟子であった精神科医が初代院長を務めたのである。以来三聖病院は、入院原法の貴重な専門施設として、今日まで機能し続けている。病院の現在の外観（図5）は、設立当初の姿とほとんど変わっていない。私自身、長年にわたってこの病院での臨床にかかわっている。その経験を通じて、入院治療の構造の特徴について、要点を示しておきたい。

ここに、三聖病院で、初代院長の息子である現院長が、入院患者らに講話をしている姿がある（図6）。講話と言つても、決して雄弁な説法ではなく、症状は流動する心的現象の局面にしかすぎないので、それを治そうとせず、今ここにおいてなすべきをなす努力をすることが大切である、という趣旨のことが、言葉少なに語られる。症状を

治す法を教えてほしいという患者の自己本位の期待は、静かにはぐらかされてしまう。

以下、入院による治癒過程の特徴をあげれば、およそ次のように整理されよう。

- (1) ひとたび入院すれば、治療者は患者の症状を不間に付すので、患者の訴えは受けとめてもらえない。
  - (2) 入院患者たちは、自主的に社会的な集団生活を組織して生活を送つており、各患者は集団の成員として自分自分の役割を果たすことが重んじられる。
  - (3) 集団生活の中で、人から助けられたり、人を助けたりする体験によつて、患者たちは成長していく。
  - (4) 症状を治すという一大事であつたことは、もはやテーマ性を失つてしまつ。
  - (5) 治療者は、患者と同じ地平で師として機能している。
- この過程を、患者の内面的体験の側からとらえてみると、劇的な変化が展開されることになる。人間誰しも体験する諸苦を、すべて安楽に変えたいと願うがままな患者にとって、病院はあらゆる願望が叶えられる魔術的な場所、あるいは哲学者ベンヤミンが、かつてパリに見出したなんんで

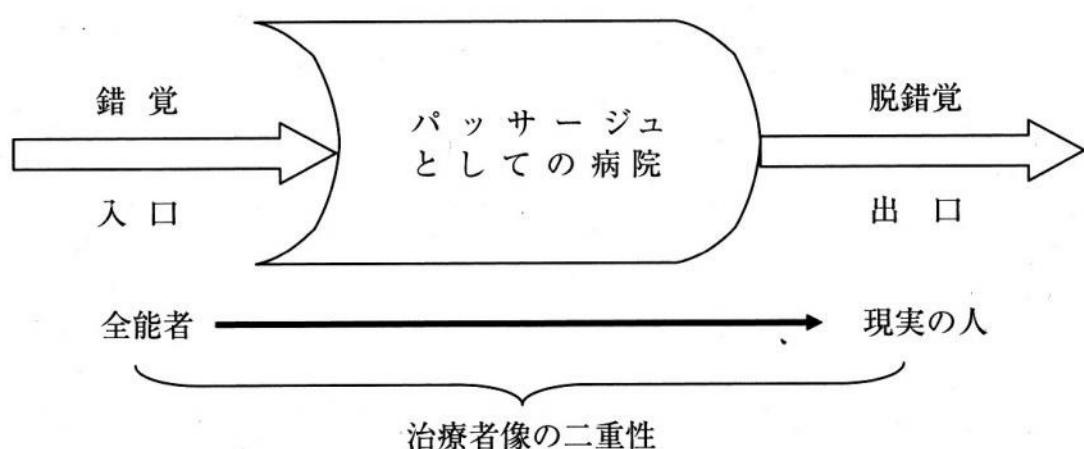


図7 森田療法の入院体験

も手に入る夢の百貨店のようなパッサージュのごとくに映じる。不快な症状を都合よく治して快を手に入れようとしていた患者の幻想的な目標は、実生活の必要性へと、コペルニクス的に向きを変えられてしまう。つまり病院は、錯覚的な入口と、現実に引き戻される脱錯覚的な出口をもつパッサージュにほかならなかつたのである。また治療者像は必然的に二重性を帯びることになり、入口においては全能者のごとく見えた治療者は、出口においては実は社会を代表する現実の人であつたことが判明するのである（図7）。

### 三 注文の多い料理店

〔以下に出てくる図8から図19までのすべての図は、写真または絵であり、仏文稿第V章中のFigure 8からFigure 19に対応するまったく同じものである。ここでは掲載を省略するので、そちらを参照されたい。〕

前述のような入院体験さながらの過程を、見事に象徴的に描いている、ある幻想的な短編小説がある。作家、宮澤賢治（図8）は森田正馬と同時代人であり、仏教の影響を受けた人で、西洋文明を崇拜してそれを貧欲に取り入れ、贅を尽くし舶来の思想にかぶれた当時の日本人の風潮を批判する立場から、多くの小説を書いた。そのひとつに、小品『注文の多い料理店』がある。そのあらすじはこうである。

都会から二人の若者が、狩猟をしようと、イギリスの兵隊気取りの格好で高級な鉄砲をかついで田舎へやつてきた。しかし鉄砲を打つこともできない彼らは、地元の熟練した猟師を案内人に頼み、山中に分け入っていく。ところが山奥で道に迷い、案内人の姿さえ見失つて途方に暮れる。やがて空腹に襲われた彼らは、山の中に瀟洒な西洋風のレストランを発見する。「山猫軒」というそのレストランの扉には、「当店は注文の多い料理店ですから、どう

かそこはご承知おき下さい」と書かれている。注文が多いというからには、繁昌している優良なレストランなのだ、と彼らは満足する。若者たちは中に入つていくが、そこにはさらにいくつもの扉があり、それらの上には、鉄砲を置くように、帽子や外套や靴を脱ぐよう、と次々と客に対する注文書きがしるされている。この店ではかなり厳しい作法が注文されるが、それは自分たちを賓客扱いしているからだと思いこみ、彼らはますます自尊心に浸る。しかし、全身に牛乳のクリームを塗るようにと指示されるにいたつて、彼らはようやく自分たちが山猫に食べられるのだということに気づき、一転して恐怖のあまりに泣き出してしまう。そのとき、悪夢のようなレストランは消え、彼らは、元どおりの、風が吹き木の葉が鳴っている山の自然環境の中で、地面の上に立つてることに気づく。そしてそこへ再び姿を現わした猟師が、空腹な彼らに、夢の高級料理ならぬ本物の団子を食べさせてくれるのである。

際限のない欲望ゆえの、不満や不安にとらわれた患者が、森田療法の病院に入院して、治癒への転回を体験する過程は、まさしくこのようなものだと思われる。この小説の中で、若者たちは、素人の夢を叶えてくれそうな人としての案内人に依存するが、途中で案内人は不在となり、悪夢の体験をクライマックスにしてレストランの錯覚が消えたときに、案内人は現実の人として再登場するのである。この案内人の立ち現われ方の変化は、あたかも森田療法の治療者像の二重性を象徴しているかのようである。わがままで注文好きの患者の幻想のような目的は、入院体験を通じて削ぎ落とされ、現実のニーズという注文に従うのみの生活へと向きを変えられてしまう。患者にとつて治療者は、夢先案内人から現実の人へと姿を変える。病院もまた、錯覚的な入口と、脱錯覚的な出口のある、注文の多い料理店として機能することになるのである。

森田療法の第一の課題である神経質の入院治療の仕組みについて、ここまでに述べたが、次に典型的な神経質に

限らず、内面に空虚感を抱えて自己の存在そのものに不全感をおぼえている人たち、言い換えれば、生の苦に苛まれている人たちに対する、入院森田療法について述べることにしたい。

#### 四 明惠上人の病跡から

仏教は四苦八苦という苦の諸相を示しているが、それぞれの苦に対する特別な救済の処方が用意されているわけではない。とりわけ禪のような大乗仏教は、生と死、極楽と地獄、樂と苦といった対立が入りこむ思想を有さない。したがって、苦そのものを対象化して切り離し、それを客観的に取り上げようという視点をもたず、ただ苦に直面して迷っている人を救済しようとするのみである。森田は、神経質の治療を主眼として彼の療法を創つたけれども、京都の三聖病院でおこなっている、より禪的な療法では、性質を問わず、苦の種別を問わず、苦悩を体験しているすべての人を治療の対象にしている。それゆえ、神経質や神経症のみならず、人格障害であれ、統合失調症であれ、救いを必要とする人たちを等しく受け入れて、入院させる。だが人格障害や統合失調症の治療は、必ずしも容易ではない。種々の行動化が起ることも稀ではない。残念ながら、われわれもそれを幾度か経験している。もつとも深刻な行動化として、過去に自殺の既遂例もあった。しかしながら、入院森田療法によつて、生の苦の直接的体験、すなわち存在の不全感を伴うスピリチュアルないたみから救われて、退院し再出発して、なお悩みつつも生き続けている人たちが少なからずいることを、強調しておきたい。

ここではそのような患者の実例を引く代わりに、深く典型的な存在の苦を生き抜いた日本の昔の高名な僧の生涯を取り上げたい。それは森田療法の成立期よりもはるかに古い時代の人であるが、みずから森田療法的な生き方を

貫いた人と言つてよく、苦とともに生きたその生涯は、この療法の真髓を過去から照らしてくれるものである。

京都の街から少し離れた郊外の山の中に、高山寺という寺がある。この寺は八世紀に創建されたが、戦乱の世が続くうちに廃寺となり、十三世紀にある僧によつて再興されて、現在にいたつている（図9）。

その僧は、明恵という名の風変わりな人物であつた。以下はその僧の生涯の物語である。明恵上人のひとりの弟子によつて描かれた貴重な絵が、今も国宝として保存されているが、そこには上人が樹の上で坐禅を組んでいる姿を見ることができる（図10）。識別するのが難しいけれども、よく見るとこの絵の中には、飛びまわつてゐる小鳥の群れや、樹の上にいる栗鼠の姿も描かれていて、上人が自然の中に溶けこんでいた有様を窺い知ることができる。童子のような無邪気さすら感じられるが、実際には彼は、幼児期より厳しい運命の試練に見舞われ続けて成長した人であつた。

明恵は、治政が定まらず戦争の断えなかつた日本の中世の一七三年に、太平洋岸の片田舎の高貴で神仏の信仰篤い武家に生まれた。母はこの子を京都の神護寺の仏様に捧げて法師にするつもりだったので、幼い明恵もごく自然にそれを望んでいたところ、三歳のとき、父は、この子は美貌だから侍にするのがよいと言つた。それを聞いて悲しんだ幼い明恵は、侍ではなく法師になるには、不具者になればよからうと、縁側から転落してみたがうまくいかず、ならば焼火箸で顔を焼こうとして、先に腕を焼いてみたが、あまりの熱さに驚き、ついに顔を焼くことはできなかつた。以後生涯を通じて、たびたび彼は自傷や自殺を念慮したり企図したりしている。

七歳のとき母が死亡し、その数カ月後に父も戦死し、幼い明恵は天涯孤独の孤児となる。かくして八歳にして、生前に母が望んでいたとおりに、京都の神護寺に預けられて小僧となつた（図11）。だが戒律の厳しいこの寺での修行の生活は、子どもにとつては苛酷であり、師と仰ぐ人にも恵まれなかつたようで、彼の孤独感は深まるばかり

であつた。それでも彼は、ひたすら一心に救済を求めて、この寺で研鑽に励んだ。だが、当時の京の都の僧侶たちの、欲にまみれた醜い側面を見るにつけ、彼の疑問と迷いは一層募つて、絶望に陥つていった。十二歳のとき、「われはすでに年老いたり。無為に生きて徒らに苦悩しているのは、肉体があるからだ。いつでも死ぬ方がよい」と言い、狼の群れに喰われてしまおうと、墓場へ行つて身を横たえ一夜を明かしたが、事もなく終つてしまつた。仏道を究めようと修行をすればするほど、仏道を信じられなくなつた彼は、十六歳のとき再び墓場へ「身を捨てる」自殺の試みをするが、狼たちの餌食とはならずにならずに終つた。

先に紹介した小説『注文の多い料理店』の中の若者たちの場合、山猫たちに食べられそうになる恐怖に戦く体験をしたが、それと対照的に、明恵は生そのものの中に実存的な苦悩を体験して、狼たちに喰い殺されることを願つたのである。明恵はまた、同じ十六歳のとき、癩を病む人の治療には人肉が効くと聞き、自分の肉を切つて与えようとして、刃物を携えて山中へ入り、癩者を探すが、見つけ出すことができなかつた。

十七歳のとき、彼は釈迦の遺言が記された経文を読み、自分は釈迦の遺児なのだというほとんど確信に近い幻想的な直観を抱いた。これを契機として、以後釈迦に自分の父親像を見つづ、同時に釈尊こそ自分の唯一の師であると信じて敬慕し、当面の精神的安定を取り戻して、修行に打ちこんだ。

また明恵は十八歳のとき以来、諸仏の母とされる「仏眼仏母」の図像に、自分の母親のイメージを重ね合わせて、長年にわたりその図像を大切に保持した。この図の作者は不明であるが、両眼は優しく、両手を腹にあて、無数の白い蓮の花びらの台に坐し、月のように輝いているその体から諸仏が生まれてくるとされる。そのためこの像は「仏眼仏母」と呼ばれる。芸術的にも高く評価されるこの聖図像は、現在も国宝として保存されているが、明恵はこの絵を自分の母に見立てて、狂おしいほどに恋慕して大切にしたのであつた（図12）。

しかし、若い明恵は、俗世の種々の誘惑に負けそうになつたり、欲望や慢心を抑え難くなることがしばしばあつた。そのため二十三歳のとき、釈迦の教えを守つて仏道に励む誓いの証しとして、またもや自傷を決行する覚悟を決める。両眼を抉れば経文を読めなくなる、手を切り落とせば印を組めなくなる、耳ならばよからうと思つた彼は、仏壇に掲げた仏眼仏母像の前で、右耳を縛った糸を仏壇に繋ぎ、刃物で右耳を切り落として、その耳を仏壇に供えた。切つたときに飛び散つた血が、仏眼仏母図にもかかり、この図像にその血痕が残つているというが、今ではその識別は困難である。耳切り事件としては、ファン・ゴッホが連想される。しかし両者の自傷行為に対する精神医学的診断の比較を、ここで問題にするものではない。ともあれ明恵においては、自傷行為は、いつも必死の自己救済の努力の過程の中で行動化として突発したのである。

釈迦にひたすら帰依し、仏母を恋い慕つた熱情からも推測しうるが、彼の内界では、夢想性がかなり大きな部分を占めていた。それはときには幻想の形をとることもあり、耳を切つた翌日には、釈迦の後継者の未来仏の姿を空中に見ている。また病的ではないにせよ、睡眠中に鮮明な夢をしばしば見る傾向を有し、十八歳から死の前年の五十八歳までの四十年間、夢日記を書き続けたことはよく知られている。その日記には夢の絵まで描き添えられてゐる(図13)。彼は夜間の生理的な夢と、白日の中の直観像的な現実をむしろ区別しないことによつて、この世の無常さを認識していたようである。無常だからこそ、死後よりも、今こここのうつつにあって、なすべきことをなす実践躬行こそが大事であると自覚したのである。それでもしばしば迷いや絶望感に取り憑かれ、とりわけ三十二歳のときには、今にも発狂するという感覚に襲われて自殺念慮を抱いたが、耳無し法師と自嘲的に名乗つた姿そのままで、生き続けるのみと悟る境地に達し、心理的危機を乗り切つた。

その真摯な人がらを評価された明恵は、三十三歳で高山寺の住職に任じられ、荒廃した古刹の再建をはかる責務

を与えた。そこでその役割を果たすべく、日夜努力を重ねたが、重責であるその体験が、彼を一層大きく成長させることになった。宗教的派閥や政治権力に染まることなく、諸欲を断つて身を清く保ちつつ、彼は慈愛とその実践を尊ぶ生活を送ることに徹したのであった。

このような厳格な実生活のもうひとつの側面では、夢想性も一層膨らんで、画家たちを用いてみずから考案により、いくつかの絵巻物を作り上げた。ここにそのひとつがある（図14）。これは義湘という名の新羅の若い僧が、天竺へ修行に旅立つために私情を断ち切り、彼を恋う善妙という名の美女と別れる物語の一場面である。明恵自身、性的な誘惑にたびたび負けそうになりながらも、仏教の戒律を守つて欲望を断ち、生涯不犯を貫いた人であったが、その分、内面で募る女性への憧憬は、美化された幻の女性像の形成へとつながり、それがこのようすぐれた芸術作品を結実させたものと思われる。

五十歳のとき明恵は、度重なる戦乱で夫を失つた多くの未亡人たちを救うために、保護施設として機能する尼寺を、高山寺の近くに建立し、先ほどの絵巻物に登場した美女、善妙の名にちなんで、善妙寺と名づけた。さらにその尼寺に、善妙を神格化した善妙像を作らせて、それを安置した（図15）。この善妙神像の女性的な妖しい魅力と母性的な優しさの交錯する壯麗な美しさは、明恵自身の抱いていた女性像の具現と見ることができよう。彼にとつて女性は、誘惑的な現世の人であるとともに、仏になる人を生み育ててくれる偉大なる母なのであつた。

明恵は、五十九歳で病死した。最期は從容として死についたと伝えられる。しかし彼の仏道精神と実修方法は、晩年にいたるまで絶えず動搖していたという批判もある。実際、彼の生涯は、幼少期から晩年までスピリチュアルないたみとの対決の連続であり、自己をどう救済するかが終生の課題であつた。その模索の過程において、種々の病的な体験や行動が現われた。夜の夢のみならず、白昼夢も多くて、エイデティック（直観像素質者）であったよ

うだが、幻想やさらに幻視すらあつた。このような視覚的感覚性の病理は、女性を美化する夢想性と結びついて、幾多の美術作品の製作として結晶を見た。また若年期には、自傷行為や自殺企図などの深刻な行動化がたびたびあつたが、高山寺を引き受ける責任ある身となつてからは、自己破壊的な行為は見られなくなつた。ただし、正義に強くこだわつて、釈尊の教えを曲解していると見えた、ある既成の仏教の宗派を激しく攻撃した。一方では、晩年まで、幼い子どものような数々の奇行のエピソードもあつたようである。

ここでは明恵の精神医学的診断をすることが目的ではないので、それはさておくとして、われわれが教えられる重要なことがある。それは、彼がスピリチュアルないみを抱えながら、釈迦を父なる師と仰ぎ、その教えのとおりに、自己を空しくして他者に慈愛を注ぐ生き方に徹する努力を重ね、曲折を経ながらも仏母のまなざしに見守られて、他者を救済することで、いつのまにか自己が救済される境地に入つていつたことである。他者にひたすら尽くすことが大事であり、そのあまつた恩恵として、自己も治つてしまふという機制は、森田療法とまったく同じである。明恵の場合、強いて言えば、第一の治療者は父なる釈尊であり、第二の治療者は、彼の人生を優しくみつめてくれた母なる仏眼仏母であつた。そして第三の治療者は、克己心をもつて生き抜いた彼自身であつた。

## 五 蓮とその孔

稿をしめくるにあたつて、眞の救済とはなにかを如実に教えてくれる、仏教ゆかりの植物、蓮について述べておこう（図16）。くれない色あるいは白色の清浄な蓮の花は、究極の解脱の姿を表わす象徴として古来仏教徒に親しまれ、その花びらは仏像の台座にもなつてゐる。

しかしこのような美しい花を咲かせる蓮は、泥池に育ち、地中に深く根を下ろしている（図17）。泥の中の根なくしてその花は咲かないのだが、さらに特筆すべきは、その根には孔があいており、孔が蓮の成長に重要な役割を果たしているのである。

蓮の根は、日本では蓮根（れんこん）と呼ばれ、食材となつており風雅な味がする（図18、図19）。その蓮根は孔の部分がもつともおいしいと言われる。ともあれ、この孔は人間に空っぽの意義を再認識させてくれる。たとえば、なんらかの器や、部屋は、空虚な空間があるがゆえに、なにかを容れることができ、それによつておのれを役立てることができる。同様に人間においても、満たされた自己が充実しているとは言えず、むしろ逆説的に、空虚な自己こそ、無限の可能性を秘めていると言うことができる。自己」という器には、なにを容れるのが望ましいのだろう。そこに自己自身を容れようとすれば、自己への執着から、仏教で言う八苦の前半の四苦の囚人になるのみである。また自己に奉仕する対象を容れようとすれば、後半の四苦の囚人になる。

自己は、他者との関係において、はじめて自己となる。自己の器に他者を容れるとき、はじめて自己が開花するのである。花は見る人にとって美しいが、自身はその美しさを知らない。空虚な孔をもつ土中の根こそ、清らかな美しさを咲かせる根であることを、蓮がわれわれに教えてくれるのである。